

俺は某スーパーで店長をやっている。  
店長をやっていると色々悩み事はある。

「これはなんだ？」

「……………」

こいつの名前は、萩中汐里（しおり）。万引き犯だ。

そしてこゝはスーパーの事務所。現在、彼女を取り調べ中である。



GUM

Bolkky

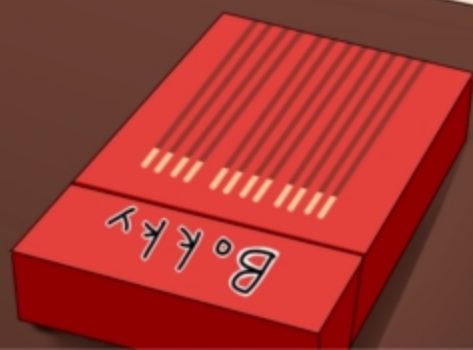
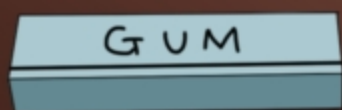
「鉛筆に、消しゴムに、ガムに、お菓子……どれも安いものばかりだな。家が貧乏なのか？」  
「いえ……つい出来心で……」

「出来心ね……お前みたいなのやつが、一番たちが悪いんだよ」

「……」  
「ごめんなさい。進路のこととか、受験のこととで悩んでてストレスを抱えてて……」

「そんな言い訳が通用すると思うのか？」

「……」  
「ごめんなさい」



「ごめん、で済むなら警察はいらないよ。まあ、「ご」は警察を呼ぶしかないね」

「それは困ります…：両親に怒られちゃう」

「当たり前だろう？犯罪なんだから」

「本当にごめんなさい…：代金は払いますから…：」

「だから、そういう問題じゃないんだよ」



「うっ……うっ……」

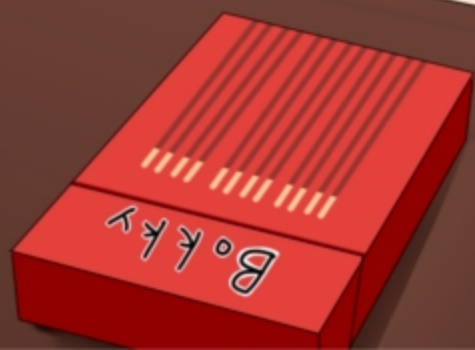
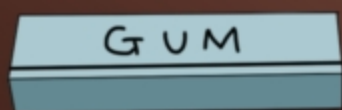
「はあ……今度は泣き落としか？ふざけた奴だな……」

彼女はいかにも育ちの良さそうな感じだ。親も彼女に期待していたのだろう。それが彼女にとってには重荷になっていて、ストレスになっていた。……とまあ、そんな所だろう。しかしそんな事は言い訳にならない。

ぐすっ……

「うっ……うっ……」  
「ごめんなさい……許してください……」  
「何でも……何でもしますから……」

「ふーん。なんでもねえ……」



ジーツ…俺は彼女の体をまじまじと見る。

「ジュくっ…」

「…いつは中々いい体をしている。それに、顔も整っていてかなり可愛い。」

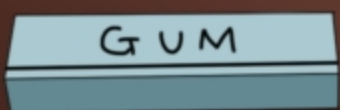
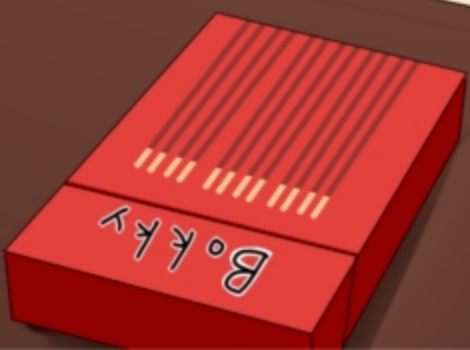
（へっっ、これは久々にいい獲物にありつけそうだぜ）

ぐすっ…

ぐすっ…

「…本当に何でもするんだな？」

「は…はい…」



「よし、分かった。それなら考えてやるわ」

「ほ…本当ですか？ありがとうございます…！」

ありがとうございます…！」

俺の一言で仏を見たかのように、パツと笑顔になった。これから何されるかも知らずに。馬鹿な奴だぜ…。

